

## 編集室から

先月末、嬉しいことに本ニュースレギュラー陣から2冊の書籍が出版されました。

一人目は、現在「経済っばいこと」というシリーズ名で連載されている江川さん。

かつて、「会社再建の当事者として」というシリーズ名で連載して頂いていました。このシリーズが電子出版として、2月21日にリリースされました。

ご所属でした大手の建設コンサルタント会社が倒産。その直前頃から再建のための役員団のお一人として就任され、そのチームワークと個性あふれる関係者とのリアルなやり取りを再現されていたことは、今でも印象に残っています。

一方で、このような情報が得られる機会は滅多に無く、ノウハウ・心得としても世間の役に立つものと、連載中から感じていましたので、今回の出版は、私としても首を長くして心待ちさせて頂いていたところでした。

二人目は、恥ずかしながら私です。本ニュース第一号から昨年師走号で、丁度15年。のべ180編となったコラムを再構成して一冊にまとめました。全体を通して一貫したテーマを想定していた訳ではないのですが、仕事を通じて各種の社会起業のお手伝いを差し上げ、また自らも2度起業していることから、知人の出版社社長から強く勧められ、お蔭さまで、2月26日に、出版の運びとなりました。こちらは、電子出版と、オンデマンド出版の2タイプです。

後者は新しい出版形式で、注文ごとに印刷・製本して、通常の本のように届けてくれます。この方式だと、出版社に在庫の負担が少なく、これまで同様、紙の本としても読めるので、普及していくかもしれません。

江川さんの本と、私の本、アマゾンから著者名で検索してみてくださいませ。(は)



Chintara

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3

ライオンズマンション道玄坂1階

本ニュースにレギュラー執筆  
していただいている川島さん  
が「能登の夜市」の姉妹店を  
開店されました。

上京された際、ご利用になっ  
てみてください。

もちろん、川島さんご自身も  
お店に立っておられます。

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2016/03

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

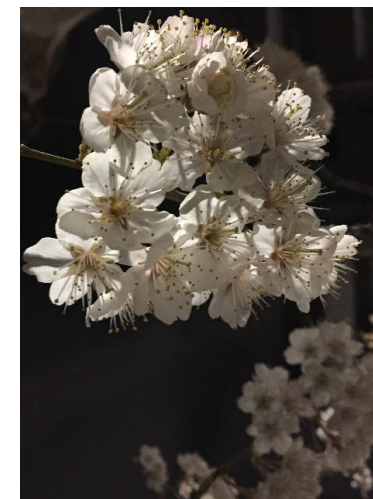
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2016/03

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

# 弥 生



お江戸にて  
by hama

20XX年、福井県坂井市の丸岡城が国宝に指定された！。すると間もなく、毎号に付録が付きそれらを組み立てていくと、最終60号で百分の1スケールの精密な丸岡城が完成するという雑誌が発売された。創刊号は特別価格で500円だが、通常価格は2千円で総額約12万円。地元に住む歴史好きの本多さんはずぐこれに飛びついた。途中で解約した場合でも、お金はそれまでの分だけ払えばよく、気軽に始めることができた。

最初は新しい号が届くのをとても楽しみにしていたが、15号あたりで飽きてきて、組み立てるのを一旦止めた。世間の国宝ブームが一段落するなか、石瓦の質感が少し期待外れだったことに加え、仕事やプライベートが多忙になってきたからだ。でも20号までいくと“特製 笑うお仙と肥えた馬”がプレゼントされるので、「もう少し」と思いそのまま継続した。送られてきたフィギュアが思いのほか素晴らしい、再びスイッチが入り組み立てを再開した。しかしながらその熱意も長続きはせず、25号で「もう止めよう」と思ったものの、中途半端な天守閣を見れば見るほど、「ここで止めたらここまで投資した分は無駄になる」という思いが深まる。そして、完結しないまま最終号まで購読を続けたものの、完

成はそれからずいぶん先になってしまった。また、窓の外に見える本物と室内のそれを比べると、どうしても屋根に違和感を感じてしまったのであった。

ある事業や取組にそれまでに投資した資金や労力のうち、それを中止しても戻ってこない資金や労力のことを、埋没費用（サunkコスト）という。既に行ってしまった投資の大きさに固執し、それがもはや回収不能の埋没費用であることを知りつつも、さらなる投資を続けてしまうことがよくある。上述の例にもこれが当てはまり、もはや続ける意味を失っていたにもかかわらず、25号分の既投資分を重くみて継続し、結果としてその後の追加投資に見合うだけの満足感を得ることはなかった。これは個人レベルだけではなく国家レベルでも起きうる現象で、フランスとイギリスが止められなかったのが、コンコルド計画である。

埋没費用はいろいろな場面でトラップになり、その支払者の合理的行動を妨げる。「もうこの人に50万円以上貢いでいるから、愛はないけど止められない」というのも、「もうこの事業に50億円以上つぎ込んでいるから、効果はあまり見込めないけど続けざるをえない」というのも根本は同じ。このトラップを利用した商売も数多い。スパッと切り替えられる勇気を持ちたいものだ。

注1：福井県坂井市は昨年9月、丸岡城国宝化推進室を開設し、現存最古の天守とされる丸岡城の国宝指定を目指している。

## 濱のつばやき 『ハラの内』

深層心理・潜在意識・無意識…

これらの言葉をよく耳にするようになった。言葉は違えども、意味するところはほぼ同じだと思う。

我々、人間も生き物である。生き物でしかも動くものある以上、生物学的には動物が土台になっている。ヒトが動物と最も異なるのは、大脳新皮質が脳の周りを覆っていることだろう。ちょっとグロテスクな言い方かも知れないが、「ヒトとは、ホモサピエンスという動物の大脳に、ヒト特有の新皮質が取り付いて、誕生した」ようなイメージか。

このような身体的構造の故か、実は我々が自覚している以上に、深層心理に影響を受けているらしい。

たとえば時折、得体の知れない怖れ・不安に襲われることがある。どうやらこの感情は、脳の深いところから湧き上がっているかもしれない。

動物脳は、保守的である。過去に「生きながらえた」という一種の成功体験を基に、直面した事態を判断し、対応しようとする。これでは、未体験のこと、新しいことに出会ったならば、不安・怖れを抱くのも無理はない。何故なら、判断すべき過去の体験が無いからである。

心理的には、このような保守的判断に居座り続けてしまう状態を、「居心地が良い」という。居心地が良いから、その状態をできるだけ維持しようとする。

無意識に…

ここが、人生の創造の壁だ。新しい一歩が何故か踏み

出せないのは、動物脳をベースとした人間の脳の仕組みに拠るのだというのが、脳科学の最新成果のようだ。

だとすると、新しいことに挑戦し続けている人は、どうやっているのだろうか。

全く新しいことに取り組んでいる人は、実はかなり少ない。大抵のことには、僅かでも先達がいる。その少数を手本にして、想像力を駆使して自分の居心地の良さを拡張できる人が、その後が続けるのかもしれない。

もう一つあるとしたならば、それは素直に自分に対して正直な人だろう。他人の目、世間の目よりも、自分がワクワクすることに忠実であるうとする人。このタイプの生き方を選択する人が増えているように感じている。

「ワクワクすること」は、人によって違う。人の顔がすべて異なるように、それもまた個性であるかのように異なっている。そして、「何故ワクワクするのか」理由がよく分からないことが多い。ということは、「ワクワクする」理由は、深層心理・潜在意識・無意識の中に在るのではないか。無意識の中にある事は、理屈・理性では判らない。理性・理屈が先に立つ現代人にとって、理屈で考えていくと何処までもたどり着けないのかもしれない。自分でも判らない「自分のハラの内」といったところか。

\*\*\*

数日前、少年期からの願いだった著書を世に出せた。「ワクワクすること」の一つが実現した。多くの方々のお蔭である。

さて、次はどんなワクワクに挑戦しようか。と、自らのハラの内を探っている。

一世を風靡した「ちょい悪おやじ(死語になりつつある)」のブームを作り上げたLEONが創刊10年の節目を迎えるようです。

このLEONの登場とともに、世の中のおじさんたちがファッションに目覚めたと言っても過言ではありません。新しいマーケットを創造したという点でも歴史に名を残す雑誌なのでしょう。

正直あんな雑誌絶対恥ずかしくて誰も買わないのでは?と、当初考えていた私のマーケティング力の稚拙さが情けなくなります。

気を取り直して、では「大人のファッション」とは一体どういうものなのでしょうか?

○ とりあえず一つ一つのアイテムにお金がかかっている。

○ なんとなく、シャツを着てジャケットを羽織っている。

○ アイロンがきいていて、ズボンもパリッとしている。

という世間の勝手なイメージがあるだけで、本来明確な定義なんてありません。

私も40代半ばになってみて周りの同年代の友人に会うと「お前若いころおしゃれだったのに、今どうしちゃったの?」というケースが多々あります。得てして、若かりし頃に“おしゃれ”と言われていた人ほど、大人になってのファッションに困っている人が多いと思われまます。

その理由の多くは、

『自分が好きなスタイルが大人(おじさん)になると恥ずかしくてできない』

だから、ついつい当たり障りのないオジサン的スタイル(チノパン・ポロシャツみたいな)に逃げてしまう。という一種の拘りからくるジレンマから来るからではないでしょうか?

つまり自分自身に明確な定義がないということです。

私も10代後半~30代にかけてファッションにはお金をかけました。平均月10万円以上は使っていました。今計算するとフェラーリ1台は余裕で買えます。

当時はセンスのいいファストファッションという業態はなく、ちょっと女の子にもてる格好をしたい(これ自体がもう廃れた考え方)となると、セレクトショップやブランドショップに行かざるをえないという時代背景もあります。

そして、30代後半にはご多分にもれず『大人のファッションしなきゃ』と迷走しました。

しかし、現在は私なりの「大人としてのファッション」を見つけることができました。

・ お金?

子供二人いてそんなにかけられません。

・ 若いころの服をポリシーを持って着続ける?

ポリシーがあっても体が入りません。

では何か?

それは“自分の好きな色をベースに組み合わせる”ということです。ピンク、赤、紺という色の組み合わせを若い時分から購入する傾向がありました。そこで、ファストブランドだろうが、有名ブランドだろうがその色のものだけしか買わないと決めたのです。

そうしたら、何を着てもまわりから「それ、川島さんらしいよね」というイメージが醸成され、四十路半ばにして「第二次オシャレさんだねブーム」が到来したのです。

私の考える大人のファッションの定義は「好きな色使いで自分を演出」です。

ちなみに先日の日経MJの社会トピックス面でも同様の記事が出ていました。決して引用ではありませんのであしからず。



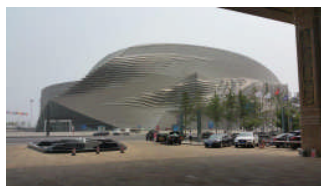
車窓から果てしなくつづくとうもろこし畑から、裸地が見えたとたんすぐに建設中の超高層マンションが何棟も現れた。もうすぐ終着のハルビンだ。熱い日本を抜け出して中国北部、隣はロシア、そこまで行けば涼しいだろうと、福岡 - 大連を飛行機で飛び、2泊した後ハルビンに中国版の新幹線で向かった。特等、1等席に乗ると水とお菓子が入ったプレゼントがある。日本製の新幹線であって欲しかったが、残念、ドイツ製だった。

7月26日に到着した大連では度肝を抜く建築に出会った。新国立競技場の設計で名が知れ渡った建築家ザハ・ハディッドばりの複雑な彫塑的な建築だ。夜になると金属板の鎧を着たこの建物は夜甲虫のごとく色を変える。大連国際展示場である。

友人の家族には大変お世話になった。着いた当日にご馳走いただけたら何と滞在期間中、四晩とも晚餐会が用意されていた。全て個室で各部屋には20人が食を囲むことのできる椅子に丸テーブル、食事前の一時を過ごすソファ、トイレがある。次々にできたての料理が電動のターンテーブルに置かれ、目の前にきた料理を銘々に取っていく。

ここハルビンは東北料理の類いに入る。内陸部であるから、魚介類よりも肉料理、野菜料理が多い。しかし、コテコテの郷土料理ではなく、中国の国内外の料理がアレンジされている。苦手なパクチー、内臓の類さえ入っていなければ大方の料理は美味しく頂戴した。

ハルビンは、毎年ビール祭りが行われるほ



ど「ビールの都」として有名。ビールの一人当たり年間消費量一位は文句なしのミュンヘンなのだが、二位三位は諸説あるようで、モスクワだったり、パリだったり、ハルビンだったりする。少し軽めのハルビンビールは辛め、炒めものが多い料理に相性がいい。乾杯「カンペイ」と言われ互いに杯を一気に空ける飲み方にお腹が膨らみ抵抗はあるが、基本的に自分のグラスには自ら注ぎなので、ある程度マイペースで飲むことはできる。カンペイの時には相手を立てるべき時には自分のグラスの淵を下に当てる必要がある。日本でもその事を意識する人も見受けられる。離れた席の人に対してはターンテーブルにグラスの底を当ててカンペイの形をとる。

宴もたけなわになると、小生には毎晩お務めがあった。昼間に案内を受けているので、その感想を述べることだ。いつも必ず言ったことが、運転役を担った友人家族の次男の振国さんのドライブテクがレーサー並だということだ。片側5、6車線を我先にと飛ばす車群、命知らずの歩行者が道路上に立って横断を試みる。駐車だって段差を乗り越え歩道を進み、巧みにスペースを見つけ出し車体を滑り込ませる。車に凹みは全くない。とても小生には運転することなどできない、助手席にいて思わず仮想ブレーキを踏む。前を見ているよりも、横に目を向けていた方が安心して乗っていることができる。目にするもの珍しいものばかりだからその方がいい。

ユダヤ人が建てた建築がハルビン市建築芸術館分館として、ロシア人兵士のために建てられたロシア正教の教会が、内部は教会要素は全くなく昔の街の様子の写真、模型が展示されている。回りは広場、ショッピングモール、ここで見た噴水が素晴らしかった。定刻に音楽に合わせて水滴ダンスが繰り広げられる。

昼食も全てご馳走してもらった。クレープに肉、野菜、ソースを塗り巻いていただく。「ハウチー」(美味しいの意味)。お粥まで出され、とてもじゃないけど食べきれない。これが残飯として処分ではあまりにもったいないと思ったところで、お持ち帰り用パック(有料)が出てきて残り物は全て収まった。(つづく)

